

都留文科大学報

第114号

2010年
11月24日(水)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学内

☎ 0554-43-4341 URL: <http://tsuru.ac.jp/>



国文学科 50 周年



第 55 回 桂川祭 (学長と鍋ろう)



理科教育公開講座



高大連携事業協定書調印式

巻頭特集

「国文学科 50 周年記念特集」…………… 2

「50 周年行事を終えて」 学科長 新保祐司

記念講演会〈要旨〉

「国文学と筆跡の認定」 名誉教授 久保木哲夫

「壺井栄論と作家誕生の秘密」 名誉教授 鷲 只雄

「50 周年に寄せて」 卒業生・教授 楠元六男

英語圏事情研修報告…………… 6

英文学科准教授 三浦幸子

英文学科 2 年 晴山淳平／英文学科 2 年 塩崎洋太

夏休み学外で学ぶ…………… 8

国文学科教授 鈴木武晴／国文学科 4 年 小坂萌実

英文学科教授 鷲 直仁／英文学科 3 年 竹内哲平

国際交流室専門員 周 非／英文学科 2 年 松山 瞳

比較文化学科准教授 山本芳美

比較文化学科 3 年 平原瀬菜

教育実習報告…………… 12

初等教育学科 3 年 渡邊瑞穂

英文学科 4 年 中野敬裕

国文学科 4 年 佐藤美姫

講演会だより…………… 15

英文学科・英文学会共催講演会

キャリアサポート講演会

ジェンダー研究プログラム運営委員会講演会

惜別 社会学科武居秀樹教授を偲ぶ…………… 18

社会学科教授 横田 力

特別企画

「本部棟只今耐震工事中」…………… 19

文大だより…………… 20

パソナ学職カフェ／第 55 回桂川祭

空手部荻原選手堂々の 4 連覇

県民コミュニティーカレッジ講座／市民公開講座

現職教員教育講座／文大名画座／前期終了者卒業式

桂高校と高大連携事業協定に調印

リジャイナ大学表敬訪問／秋季オープンキャンパス

昇任採用人事／情報センターからのお知らせ

本 ぶんだい堂／編集後記…日向良和…………… 24

国文学科 50 周年記念特集

去る8月7日（土）の午後、国文学科創設 50 周年記念講演会と祝賀パーティーを盛会のうちに終えることができました。

御講演を頂いた、久保木・鷺両先生をはじめ、実施にあたってさまざまな御協力を頂いた国文学科の教員各位、事務局の方々、そして何よりも準備に大活躍してくれた助手の松本理愛さんと国語国文学会の皆さんに、あらためて厚く御礼申し上げます。

50 周年行事を終えて



国文学科長
新保祐司

国文学科は、この 50 年間に、のべ約 6 千名の卒業生を世に送って来ました。この同窓生の皆さんが、さすがに都留の国文の卒業生は違う、といわれるような御活躍をそれぞれの分野でされてこられたからこそ、こういう立派な歴史が作られたのだと思います。

記念講演会には、160 名ほどの同窓生が熱心に聴講されました。久保木・鷺両

先生の教えを受けた方も多く来られていて、講演の合間には、懐かしそうに話をされていました。

祝賀パーティーには、100 名ほどの方が出席され、コミュニケーションホールの会場が、満員になるくらいの盛況でした。

加藤祐三学長の挨拶、小林義光市長の祝辞のあと、1 期生の佐藤英雄さんが思い出を語られました。そして、西室陽一理事長の乾杯となり、会場は旧交を温めあう同窓生の皆さんの楽しく、明るい声があふれました。

今回、都留に来られた方は、北は北海道から、南は九州まで、まさに都留文科

大学らしく、全国さまざまのところから駆けつけてくださいました。

また、欠席された方も、返信葉書に、あたたかい御祝いの言葉やうれしい励ましの声を寄せて頂き、同窓生の皆さんの愛校心の深さにあらためて感銘を受けた次第です。

和気あいあいのパーティーも、1 時間半があつという間に経ち、椎廣行事務局長の閉会の辞でお開きとなりました。

今回の 50 周年を機に、国文学科の歴史と伝統をしっかりと受けつぎ、さらなる発展をめざさなくてはならないと、強く決意しております。



加藤祐三学長の挨拶



1 期生の佐藤英雄氏

巻頭特集

国文学科創立 50 周年記念講演会

国文学と筆跡の認定
〈要旨〉

名誉教授・元学長
久保木哲夫

ひとくちに国文学といってもさまざまな研究分野があります。もちろん文学の研究である以上、作品の表現を分析し、その分析を通しての批評が中心にあるべきだとは思いますが、そこに至るまでには実にさまざまな問題があります。たとえばテキストの問題、作品理解のための解釈の問題、あるいは解釈を支える語意や語法の問題、作者や時代背景などの考察も当然ながら重要な意味を持つでしょう。どの分野に価値があり、どの分野に価値がない、というようなことはありません。研究者は、それぞれの資質と関心とによって自らのテーマを決めればよいのです。私の場合、主として平安時代の和歌と、歌集の伝本とを中心に調

べたり考えたりしてきましたが、今日はそのうちのごく一部を取り上げて、たとえばこんな分野も国文学にはあるのだということをお示ししたいと思っています。

現代のわれわれは、文学作品に接するとき、一般に活字によって印刷された書物によっています。最近では電子書籍なるものも現れて急激に変化しつつありますが、歴史的には一字一字を筆で書く、いわゆる写本の時代が長くつづいてきました。古今和歌集も源氏物語も皆そうした写本によって読み継がれてきたのです。もちろん撰者の紀貫之が書いた古今和歌集とか、作者の紫式部自身が書いた源氏物語などは残っておらず、繰り返し転写された本文で読むわけですから、その過程では当然誤写などもあったでしょうし、現代ではかなり乱れた本文で読まざるを得ないことにもなっているのです。

ところが極めて稀にですが、作者自身の書いた、いわゆる自筆本が残っている場合があります。当然ながら時代が下るほど増え、中世の作品になるとしばしば目につくようになります。転写本と違って、自筆本の価値が高いこ

とは言うまでもないことです。が、資料として示した8点の図版はいずれも鎌倉時代の作品です。まず、すべて同一人物の筆跡か、あるいは複数の筆跡か、もし複数だとすると、何人で、どれとどれとが同じ人物の筆跡かということを判断してみてください。

実は、従来の認定では、5点が伏見天皇の自筆詠草、2点が同時代の西園寺実兼の詠草、残り1点が伏見天皇のお子さんの後伏見天皇の願文ということになっています。西園寺実兼の詠草はちゃんと署名が入っているので間違いありませんし、後伏見天皇の願文もその内容からまったく疑いのないものです。問題は伏見天皇の詠草で、内容を丹念に調べてみますと、うち1点は明らかに後伏見天皇のもので、2点は西園寺実兼のものであることがわかりました。これまでは筆跡の類似からすべてを伏見天皇のものとし、著名な学者のお墨付きもあって、なかには重要文化財に指定されているものもあります。国文学の研究上、筆跡の認定は極めて重要です。しかしそれがいかにむずかしいものかをこの事実は誠によく示しています。認定は認定として、その認定が正しいかどうかを確認することが大切です。学問の進歩のためには、権威ある人の意見も一度は本当かしらと疑ってみることがやはり非常に大切なことだと思います。



久保木哲夫名誉教授の講演

巻頭特集

国文学科創立 50 周年記念講演会

壺井栄論
作家誕生の秘密

〈要旨〉

名誉教授
鷺 只雄

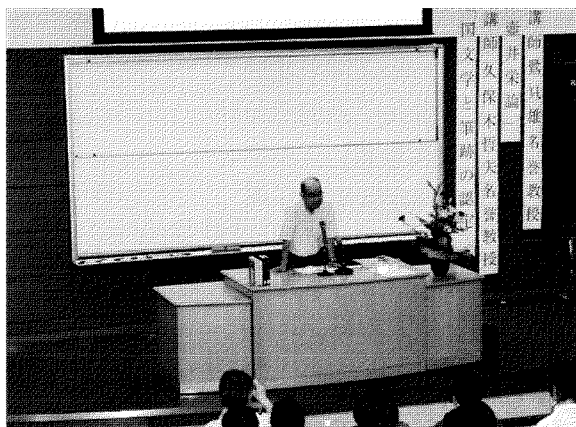
壺井栄が作家となったことについては有名な伝説がある。夫の繁治（詩人）がプロレタリア文学運動をしていた関係で知り合った作家の佐多稲子や宮本百合子から、その座談のうまさや、そこにひそむ作家的資質を発見されて執筆を慫慂され、おそろおそろ書きあげた「大根の葉」が好評で注文が殺到、文壇登場から一年一寸で第一創作集『暦』（昭15・3）を刊行、それが新潮社文芸賞を受賞したことで文壇的地位を確立してしまったのはまことに幸運と言うほかはない。加えて訪問記者の前に「水仕事をしていた台所からエプロンで手を

拭き拭き現れたニコニコ顔の善良なおばさん」のイメージが合体して、殆ど何の苦労もなしに主婦から作家へと転換したように一般には受け入れられているが、この「伝説」は余りにもキレイゴトすぎるものであって、信用することはできない。

「伝説」に言う稲子や百合子の炯眼・慫慂・指導のあった事は事実で正しい。しかし、それが全てではなかった。何故ならこれでは最も大事な事は隠蔽される結果になり、「ニコニコ顔のおばさんの半面」に隠された、血で血を洗う地獄の中から這いあがってきたもう一つの顔を想像する者などありはしないからである。

私見によればこの時栄には、夫に裏切られ、友人に欺かれ、過去15年余りに

及ぶ家庭生活も理想も破壊され、40歳を目前にして何の取り柄もない、無能な病気持ちの女として、弊履のごとく捨てられようとした、血で血を洗う生き地獄から、凄まじい作家への執念を燃やして這いあがっていった



鷺 只雄名誉教授の講演

という壮絶なドラマが隠されていたのであって、「伝説」のようなキレイゴトでは決して片付けられないことだからである。

この視点から講演では栄の生涯を見直し、黒島伝治との関係については栄の証言をくつがえす新資料を発見してその虚構性を立証し、第二の恋人太塚克三についてはその経緯を詳細に追跡し、第三に繁治と中野鈴子との不倫事件という従来未知の事件を新たに発掘して、その詳細と意味を検討した。

また従来実証的な伝記研究がすすめられていない現状に鑑み、徹底的に調査を行い通説をくつがえす新見を提示しているが、その一端をいくつか披露した。



祝賀会で歓談される久保木・鷺名誉教授

巻頭特集

国文学科 50 周年記念特集

国文学科 50 周年に
よせて

卒業生

楠元六男

(都留文科大学
文学部国文学科教授)

大学に勤務してから 30 年余がすぎ、もう停年退職というゴールも間近になった。第二の人生ではなく、これからが本当の人生などと意気軒昂ではあるが。

学生時代からかぞえと 40 年近く都留文科大学をながめ続けたことになる。おそらく国文学科の躍進を体験しえた幸せな卒業生の一人なのだろうが、それこそ「夢のような」とつぶやきたくなる激変の半生であった。

私の学生時代は、講義棟(現 1 号館)一つに事務局から図書室までつめこまれ、その閉塞感を爆発させるように学園紛争が吹きあれていった。ロックアウトされた講義棟を遠目にみながら、所在ない感覚にとらわれた記憶は鮮烈である。

こうした不安定な学生時代から大学院へ進学し、さらに都留文科大学に奉職した。

それから大学ははげしく変貌していく。本部棟と通称される研究棟の完成、社会学科開設を機に 2 号館が建てられ、比較文化学科開設にむけて 3 号館を建設、そして図書館も整備された。その間、コ

ミュニケーション・ホールもできて、ようやく大学らしい雰囲気をもたえていく。

この 50 年の間に、国文学科はまちがいなく躍進していき、多くの卒業生が多様な分野で活躍しているが、国文学科だけで約 20 名余の卒業生が大学に勤務しているのは驚異的か。九州大学をはじめとして福岡教育大学・高知大学・弘前大学など、さらには早稲田大学・立教大学・立命館大学・龍谷大学・福岡大学と錚々たる大学で教鞭をとっている。

むろん、教育委員会や高校・中学・小学などの教育現場で地道に活躍する同窓生が多いこともほこらしい。

それだけではない。「西炯子(にし けいこ)」や「やぶのてんや」などの漫画家も輩出しており、本学らしい自由な雰囲気を推定させる。

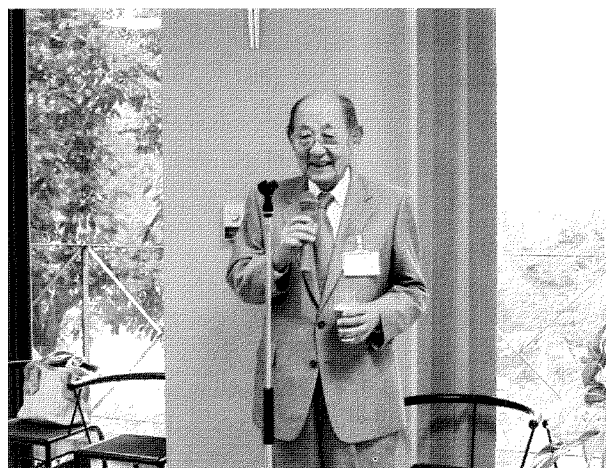
私にとって、出版界で活躍している卒業生が多いこともまたうれしい。角川学芸出版・笠間書院・学研・竹林舎・日外アソシエーツ、とそれは枚挙にいとまなからう。

教育畑で独自の地歩を築きつつ、それ以外の分野でも着実に活躍している国文学科の卒業生が大勢いるのである。これは大学にとって、財産だと

いえる。

大学が独立法人化したこの段階で、将来にむけての青写真を新たに作成すべき時期にきているのではなかろうか。教員採用試験のための特別な対策を工夫するとともに、それ以外の進路を望む学生にいかなるサービスを提供できるのかも大問題といえる。かつてのごとく教員志望が大勢をしめなくなった国文学科である。およそ 7 割ぐらひは、民間企業や公務員を志望している。この現状に即して、根本的な議論をかさねつつ国文学科のあり方を模索していくべきなのだろう。

新国文学科のさらなる飛躍を心より祈念するものだが、われわれの前にある課題ははてしなく多い。この壁を乗り越えて、これまで貯蓄してきた国文学科の財産を社会に還元できるよう、大学として改革されんことを期待してやまない。



西室陽一理事長の乾杯挨拶

研修報告

英語圏事情研修

英語圏事情研修を終えて
(英国・ロンドン)

英文学科准教授 三浦幸子



英文学科では、英語が母語または公用語として用いられている国の生活・文化・制度などについて見聞を広めるための異文化体験型学習として、毎年、英語圏事情研修を実施しています。このプログラムは、全ての学科の学生に

開かれたものですが、今回は英文学科の学生16名が参加しました。

9月5日から19日まで、英国ロンドン郊外のベッケナムという町を拠点に、滞在中は、キングス・カレッジ・ロンドン校での語学研修、現地

の英国人家庭での滞在、そして主にロンドン市内での見学が大きな3つの柱となりました。基本的に、午前中は語学学校での英語の授業ですが、他の国々から来ている学生たちと共に学ぶインターナショナル・クラスに配置してもらいました。発言力、考え方や知識の違いなど、初日からかなり刺激を受けて、自分たちに不足している点を多く発見できたようでした。日を重ねるに連れ、意思疎通がよ

ベッケナムでのホームステイ



英文学科2年 晴山淳平

9月5日から19日までの2週間、英語圏事情研修でロンドンへ行ってきました。僕にとっては初めての海外、初めてのホームステイということもあり、とても楽しみにしていました。僕たちが滞在した場所はロンドン南部のベッケナムという町です。そこにあるキングス・カレッジという語学学校に入学し、午前中は英語の授業をみっちり受けました。午後は各自自由にロンドンの中心街へと行き、演劇やミュージカルの鑑賞、美術館や歴史的建築物の見学など、様々な形で異文化体験をしました。

ホームステイ先は語学学校の近くにあり、とても温かく迎え入れてくれました。僕がお世話になったファミリーもとても優しい方たちで、僕が理解できるよう簡単な英語で家庭のことや食事のことなどを何度も説明してくれたりするなど、家族の一員として接してくれて本当に安心して過ごすことができました。

語学学校では、他国から来た学生と一緒に授業を受けました。イタリアやイランなどたくさんの国の学生と友達になることができました。

しかし、そこで感じたのは、もっと自分から英語を話せるようにならないといけない、ということです。文法ばかりに捉われるのではなく、積極的に自己主張しよう、コミュニケーションをとろうとする姿勢をこれからの学習の中で身につけていかなければならないと痛感しました。

ロンドンの街並みはとても美しく、建物の壮大さ、人々の礼儀正しさ、地下鉄の利便性など、挙げたらキリがないほど素晴らしい場所です。また、研修期間中の土日を利用して、フランスのパリにも行くことができ、英語圏外の国の文化も肌で感じることができました。凱旋門やエッフェル塔、ルーブル美術館といった世界的に有名な場所を訪れ、とても有意義な時間を過ごせました。

今回の研修で、日本では味わえない経験をたくさん積むことができ、もっと世界を知りたいと改めて強く思いました。そのためにも、日々の授業や自己学習を積極的に取り組もうと思っています。最高に充実した2週間でした。



ホームステイ先の家族と

研修報告

英語圏事情研修

りできるようになって自信がつき、最初は違和感を覚えていた相手や他国の学生たちの母語に影響された英語の発音にも慣れ、寛容性も育まれた気がします。午後は、各自の興味・関心に合わせて、ロンドン市内を中心に行動しました。歴史をテーマに、大英博物館を始めとする各所を探訪する者、若者文化にあふれたマーケット巡りをする者、好きな文学作品の関連場所を廻る者、美術館巡りをする

者、ミュージカルや演劇に足を運ぶ者など、充実した時間を過ごすことができたと思います。ホームステイ先でも、意思疎通のために英語を使うだけではなく、各家庭の様子や町での生活から英国の社会的・経済的状況を垣間見ることもでき、「事情研修」として大変有益であったと感じています。参加学生たちからは、研修を通して自らの今後の課題も見つけ出す

ことができたと聞いています。これを契機に、残りの大学生活でも多くを学び、より一層成長してほしいと願います。



ロンドン事情研修を終えて



英文学科2年 塩崎洋太

僕がこの事情研修に参加しようと思った理由は、歴史都市であるロンドンの町をたくさん見て周れることと、日本と違いビジネスライクで自主性を重んじるといわれるイギリスの人々の生活文化の違いを体験できること、それが僕の残りの大学生活で、英語を勉強していく上で自分への刺激になればと思ったからだった。

ホームステイ先では家のカギを任されたり、食器を洗う作業などの家事の一部を任されたり、朝食は棚に置いてあるものを自分でとって食べたりと何の遠慮のない生活を送った。ホストマザーはとても温かい性格の人で、夕食の際には日本のことについての話を興味津々で聞いてくれた。また同じ家には韓国人とカザフスタン人の留学生もいたので、お互いの国の文化の違いについて毎晩話し合っていて楽しい夜を過ごした。

2日目から平日の午前はずぐ近くの語学学校に通った。学校には様々な国から来た生徒がいたが、通い始めは彼らの授業への積極性を前に、なかなか自分の意見を言えずに悔しい思いをし

た。しかし2週間という短い期間なのでこのまま終わってはいけないと思い、思い切って自分が思ったことはなんでも口に出すようにすると自然と、それが対話になって、クラスに馴染めるようになっていった。それからは学校がとても楽しくなり、英語を通じて他の国の人とコミュニケーションをとる喜びを実感した。

午後からは自由時間だが、この研修の良かったところは電車でたった30分でロンドンの中心まで行けたことだった。そのおかげで僕たちは毎日ロンドンの町へ出かけ、たくさんの歴史的建造物を見て周ることができた。どこへ行ったかを挙げればきりが無いが、僕が一番印象に残っているのはシェイクスピアのグローブ座で見た“THE MERRY WIVES OF WINDSOR”だ。円形の劇場にあって劇中の役者と観客との一体感がすごく感じられて、なにより会場の熱気がすごく伝わってきて、とても興奮したのを今でもリアルに覚えている。

僕はこのロンドンでの事情研修でたくさんのことを体験したが、それらひとつひとつについて自分がまだ知らないことが多いと感じた。だがこうして自分が知らないものに出会いたくさんのことについて興味を持てたことが、これから勉強していく上でのいい動機づけになったと思う。

学外で学ぶ

日本文化史演習

日本文化史研究の旅



国文学科教授
鈴木武晴

博物館・記念館などを実地見学し、日本文化史の観点から考察を行った。多くの出会いがあり、有意義な研究の旅であった。参加して下さった学生の皆さんに心から感謝したい。

平城京遷都 1300 年を記念して「日本文化史演習」の授業を行った。ヤマトタケル伝説と熱田神宮・万葉と本居宣長・伊勢神宮と伊勢齋宮・持統女帝と藤原京・平城京と世界遺産の 5 つの小テーマに沿って、史跡や



日本文化史演習に参加して

国文学科 4 年 小坂萌実

2010 年の 9 月 14 日から 18 日までの 5 日間、国文学科の日本文化史演習に参加させていただき、愛知・三重・

で伊勢齋宮の大伯皇女（おおくのひめみこ）について調べたことがあり、個人的にも興味があったので、当時の様子を再現したビデオを見たり、服飾品や建造物のレプリカを見学したりすることにより、彼女の望郷の思いや、『万葉集』に歌われている弟大津皇子（おおつのみこ）への愛情をより身近のものとして想像することができま



奈良と旅しました。一日一日がとても充実しており、思い出深い研修の旅でした。ここではその中で特に心に残ったことをいくつか述べたいと思います。

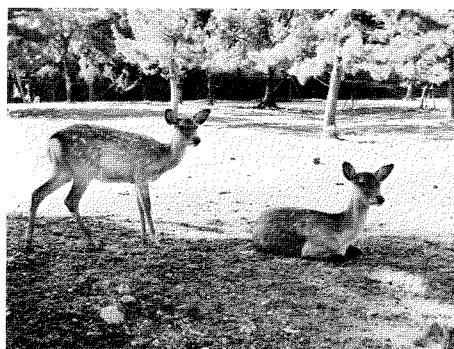
まず、2 日目に訪れた齋宮歴史博物館です。ここでは伊勢神宮に奉仕した齋宮の歴史や生活について学ぶことができます。私は以前、他の授業

した。それは、3 日目に訪れた石舞台古墳や宿泊したホテルから、大津皇子が眠る二上山を眺めることにより、更に深いものとなりました。

藤原京跡や平城京跡の見学も強く印象に残っています。藤原京跡は、本当に何もない広い野原に建物の礎石の残る場所で

したが、そこからは『万葉集』の歌に登場する美しい山々を望むことができ、その歌を詠んだ万葉びとたちに思いを馳せることができました。平城京跡も同じように、広い敷地のほとんどが野原です。しかし、その入口に建つ朱雀門やその北側の奥に再建された大極殿などからは当時の都を偲ぶことができ、実際に跡地を歩いてその壮大さを知ることができました。

それぞれの見学施設では地元の方が、その土地の歴史について丁寧に説明してくださり、地元を愛する心にも触れることができた旅でした。今回、十分見ることができなかった部分や私の勉強不足で学び取れなかった部分も多くあるので、これから更に勉強して、いつかまた同じ地を訪れたいと考えています。



学外で学ぶ

短期留学プログラム

リジャイナで学ぶ

英文学科教授
鷺 直仁

8月のリジャイナは気候もよく、カナダの夏の風景をゆっくりと眺めながら学ぶことができます。リジャイナ大学近くの人工湖には、様々な種類の水鳥も見ました。

本学学生は、リジャイナ大学のスタッフの方々にも常に高い評価をいただいております、真面目で優秀だと言われます。

今回も全員がホームステイや授業から多くを学んで帰国しました。

カナダ：Regina で
学んだ日々

英文学科3年 竹内哲平

私は8月4日から8月29日までの約4週間、大学の短期留学プログラムを利用して、カナダのリジャイナに行ってきました。現地では、同じくこのプログラムに参加した日本の他大学の人たちと一緒に、現地の講師からカナダの地理や歴史、文化について学びました。授業は2クラスに分かれて行われ、当たり前ですが、すべて英語で行われます。たまに習ったことを別のクラスの人たちに教えるといった活動もあり、まさに英語で考えて英語で行動するという感じでした。また、ただ授業を受けるだけでなく、CP (Conversation Partner)と言われる現地の学生たちとキャンプをしたりダンスを習ったりと、いろいろなアクティビティを通して直接的にカナダの文化を体験することもしました。

このプログラムを通して感

じたことは、現地の人とコミュニケーションを取る際に一番必要とされるのは、相手に自分の気持ちを伝えようとする意思だということです。このプログラムに参加する前は、語彙や文法が最重要項目で、その知識が十分ないと相手に自分の気持ちを分かってもらえないと思っていました。しかし、留学中に実際には表情や声の調子、それにボディランゲージの方がはるかに重要だということに気づかされました。うれしいときに、自

分の気持ちをわざわざ言葉にしなくても、ただ笑顔でいるだけで相手に自分の気持ちは十分に伝わります。今回のプログラムでは、英語母語話者でない人とも話す機会が何度かありましたが、その際特にこれらの重要性を強く感じられました。もちろん語彙や文法はとても大切なものだと思いますが、人と話す際には、必要以上に気を使わなくて済むようになりました。

今回の留学を通して、あらゆる面において自分の知識の未熟さを実感するとともに、これからもっと英語を通して多くのことを学んでいきたいと思うようになりました。この学びへの貪欲な気持ちをこれからも忘れないようにしたいと思います。



graduation ceremonyにて

学外で学ぶ

短期海外語学研修

中国西安での
夏季語学研修

国際交流・
語学研修室専門員
周 非

今年初めて引率者として中国の古都西安に行きました。広大な兵馬俑坑、夜に見た古色蒼然大雁塔、每晚お祭りみたいな人出のざわめきなど深く印象に残っています。大学の敷地の広さも学生達の想像を遥かに超え、ホテルやスーパーまでそろっている小さな町みたいな大学作りは学生達に語学研修のほかにも、日本と違う大学生活を体験させてくれました。この1ヶ月の語学研修を通して学生達の世界は確実に広がったように思います。



中国短期留学レポート

英文学科2年 松山 瞳

私は今年の夏休みに、1ヶ月の中国短期留学を経験しました。現地での生活は毎日とても充実しており、本当に行ってよかったと思っています。しかしながら、この留学に行く前には、行こうか悩んだ時もありました。なぜなら、自分の中国語の能力に自信がなかったことや、それまで海外に行ったことがなかったこと、また私は英文科なので英語圏の留学にも興味があったからです。しかし、実際に留

学説明会に参加してみて周非先生やこの留学を体験された先輩方の話を聞いて、とても興味を持ち参加することを決心しました。

陝西師範大学の先生方は私達を快く迎えてくださり、とても親切でした。いつも付き添ってくださった馬先生には本当に感謝しています。また、心配していた中国語の授業でも、先生はとても丁寧に分かりやすく指導してくださったので、安心して授業に

臨むことが出来ました。もちろん、現地で先生方は中国語と時には英語を織り交ぜながら指導をしてくださるので、リスニング能力はとても進歩したと思います。実際、最

初の授業では先生のお話を聞き取るのに苦労した場面もあったのですが、閉会式ではスムーズに聞き取ることができるようになりました。

西安は歴史的に有名な都市でもあります。火曜日と木曜日の午後には、歴史の授業もありました。その授業では西安の歴史や中国の歴史について学ぶことができました。この授業では通訳さんがいらっしやったので、もし分からないところがあれば日本語で質問することができ、より中国の歴史について深く知ることができました。また土曜日と日曜日には馬先生が私達を引率して、西安の歴史的に有名な建築物などを見せてくださいました。それらはとても美しく、4000年の歴史を直に感じる事ができました。

今現在、日中関係は良くないですが、この留学を通して中国の歴史や文化、そして人々を実際に目にすることができて本当に良かったと思っています。少しでも多くの人が中国を訪れ相互理解に励み、日中関係が少しでも良くなればと望んでいます。



陝西師範大学図書館前にて

学外で学ぶ

フィールドワーク・石垣島

石垣島での
フィールドワーク比較文化学科准教授
山本芳美

学外研究のため、来年のFWは休止ですが、気がかりなお知らせが最近ありました。9月から小学生がいる明石の数家族が石垣島中心部に移転され、幼児から40代の人口が急激に減少したとのこと。移住ブームに沸く石垣島ですが、過疎化も進行し、祭の担い手を外部のマンパワーに求めざるを得ない状況です。学生たちには、FWを通して地域調査の方法だけでなく、こうした現代の祭りの運営の特質や農村の現状を学んでほしいものです。

比較文化学科では毎年、教員が引率して文化・歴史を学ぶフィールドワーク（以下、FW）を催しています。2004年から7年間続いた沖縄・石垣島FWです。石垣島の開拓集落である明石にて、エイサーの練習、「エイサーまつり」の準備から本番、後片づけに参加します。祭のお手伝いを軸に、牛の世話や農作物の収穫、教育機関や織物工房・屠場見学、鳩間島や竹富島滞在など、地元の方々のご協力を得て、毎年異なる体験を盛り込んできました。

明石小学校の大兼和佳子校長から
離島教育についてお話をうかがう文化交流学習
—明石での交流を通して—

比較文化学科3年 平原瀬菜

2010年8月17日から25日まで、私たちは明石に滞在した。主な活動は旧盆に行われる祭りでエイサー（盆踊り）を集落の人々と踊ることであった。エイサーはもととも沖縄本島のもので、本島から来た開拓の人々が携えてきた踊りだ。

祭りの日までは集落を一周して地理を確認したり、明石小学校で校長先生のお話を伺ったり、地元の食材を使った料理をしたり、農作業のお手伝いをさせていただいたりした。また石垣島内を青年団の方にご案内いただき、



御神崎灯台にて、明石の青年たちと記念撮影

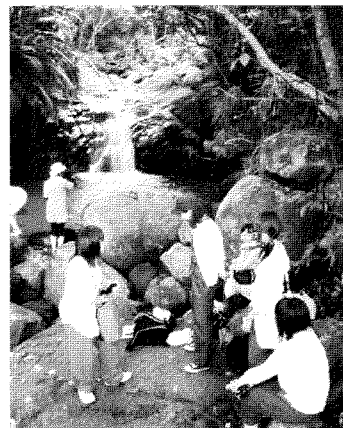
土地に纏わるお話をいろいろと伺った。祭り後には卒業生の実家を訪問したり、専門家から石垣の

盆行事であるアングマの解説をしていただいたりもした。

明石の滞在中には毎晩、集落の中心に位置する公民館の横、祭会場である広場に集まってエイサーを練習した。エイサーは公民館の広場に設けられた舞台を囲み、女性は内側、男性が外側の円をすれ違うように踊る。事前学習として映像資料と山本先生の踊りを見て練習していたものの、最初は真似するのが精一杯だった。しかし集落の人々と一緒に練習した結果、祭り当日には観光客のお手本になるくらい踊りの

輪に馴染んでいた。

祭りの日は午前中に牛汁を作るのを手伝い、夕方からエイサーを

石垣島一周の途中、
荒川の滝でひとやすみ

踊った。踊りを終えた後は後片付けをし、反省会をした。私たちの紹介も行われ、地元の方々と夜半まで話しこんだ。翌朝は6時頃から後片付けが行われ、祭りが終了した。

最初、自分からなかなか集落の人々に話しかけられなかったが、祭りの過程で話す機会のなかった方と話しができた。初めから話しかけていれば、もっと親しくなれたのではないかと思うと心残りだ。またこれまで意識していなかったが、滞在する土地の生活習慣を注意深く見聞することの大切さを知った。主体性をもって動くことで得られるものが多い、と知った文化交流学習だった。

教育実習報告



母校での教育実習

初等教育学科3年 渡邊瑞穂

私は母校の小学校で教育実習をさせていただきました。実習へ行く前は、私なんかが教壇に立ち授業をすることができるのか、子どもたちと仲良くなることはできるのかなど不安ばかりでしたが、素晴らしい先生方やかわいい子どもたちに支えられ、充実し濃密な1ヶ月間を過ごすことができました。

1日目、緊張しながら教室へ行きあいさつをすると、子どもたちはキラキラしたまっすぐな目でこちらを見ていて、私を受け入れてくれていることが分かり、とても嬉しくなりました。教室にいると、すぐに子どもたちから声をかけてきてくれて、自分のことを話してくれたり、私のことについて質問してくれたり、冗談を言い合ったりなどして、いろいろな話しをすることができました。だんだんとお互いのことを知ることができ、少しだけかもしれませんが信頼し合うことができたかなと思います。

初めての授業は、私の専攻でもある音楽でした。自分なりによく考えて指導案を作ったつもりでしたが、実際にやってみると上手くいかないことばかりでした。特に、発

問や説明の言葉を分かりやすく言うこと、時間配分、集中して授業に取り組めるように興味をひくことが難しかったです。しかし、そんな下手な授業でも子どもたちは楽しそうに授業に取り組んでくれました。

研究授業では理科をやらせていただきました。授業をやって、実験では予想を立てることが重要で、対立意見や面白い意見など、子どもたちの意見をひろっていくことがとても大切なことを学びました。担当の先生には丁寧に指導していただき、また、多くの先生方が応援の言葉をかけてくださって、私は子どもたちも含めたくさんの方々に支えられているからこそ頑張って授業をすることができたのだと感じました。

最後の日にもらったクラスのみんなからの手紙には、「先生の授業は楽しかった。」「もっと一緒に遊びたかった。」と書いてあり、子どもたちも私と同じく楽しんでくれていたのだと

分かりとても嬉しかったです。

1ヶ月間教育実習を通して、授業を作る難しさ、そして休む暇もないほどの忙しさを肌で感じました。しかし、それ以上に嬉しいことや感動することがたくさんあり、教師はとてもやりがいのある仕事だと思いました。初めて「先生」と呼ばれたときや子どもたちの歌声を聴いたとき、子どもたちのやさしい心を見つけられたときなど、些細な事ですすがとても感動しました。今回教育実習へ行き、教師になりたいという気持ちが一層強くなりました。

授業をしたこと、先生方に教えていただいた多くのこと、子どもたちと鬼ごっこやバレーボールをしたこと、たくさん話しをしたことなど、実習でのひとつひとつの出来事全てが私にとって大切な宝物となりました。

今回教育実習で学んだ経験を活かして、素敵な先生になれるように、これから勉強を頑張りたいと思います。



道徳の授業（4年生）

教育実習報告



教育実習を終えて

英文学科 4 年 中野敬裕

6 月に母校の中学校で 4 週間の教育実習を体験させていただきました。実習を終えての率直な感想は「忙しいなどと思う間もなく 4 週間が過ぎで行った」というもので、非常に内容の濃い充実した日々だったと感じています。

まず、教科指導についてですが、私は大学での模擬授業の他には授業をしたことなく、きちんと授業ができるか不安でした。何度も英語科の先生方の授業を見学させてもらい、授業の進め方を確認しましたが、自分でやることはまったく別次元のことでした。実際、自分の初めての授業は自分自身でも感じ取れるほどひどいもので、当然、指導の先生からは、授業の展開の仕方から板書方法、教壇における立ち振る舞いに至るまで様々な点を指摘されてしまいました。その先生は「初めての授業なので上手くいくわけがない」と言って励まして下さいました。私はこの授業以降、「完璧な授業を展開することはできないけど、授業の準備を完璧にすることはできる」と思い、「教材研究、授業、反省・改善」といった流れを繰り返し、空き時間は先生方の授業を見学

し良い点を吸収するよう努めました。実習の集大成となる中 1 対象の研究授業では、大学の模擬授業でも扱った「オーラルインタラクション」を試み、自分のできる最高の授業ができたと思います。先生方からも「これまでの反省点が改善され、今までで一番いい授業になった」と言っていただき、達成感があったと同時に、改めて授業の準備と教材研究の大切さを実感しました。

次に生徒指導についてですが、これが実習中、最も難しいと感じた点です。実習生であっても、個々の生徒の指導に関わる場面は多くあり、無責任にはできないからです。私の担当学級は中 3 で、実習中に、生徒にとっては中学校最後の運動会があり、担任の先生が忙しい時は私一人で生徒の練習に立ち会うことが何度ありました。その際、練習に参加しない生徒、生徒間の衝突や不平不満

などの問題にぶつかり、頭では「何とかしなきゃ」と思っても、実際にはどう対応したらいいのか悩むことが度々ありました。このことを担任の先生に相談し、「自分の中学生時代を基にアドバイスをしたらどうか」という助言を得て、自分の経験を話して解決のヒントを生徒に伝えようと生徒たち自身がお互いにしっかりと向き合うようになりました。運動会本番では、苦戦した種目で優勝し、練習時の問題などは忘れて皆が喜んでいるのを見て、自分が生徒の時とは違う感動を味わうことができました。

これらの困難を乗り越えられた経験があったからこそ、実習がより充実したものとなり、また、教員を目指す気持ちが強まったと言えます。教員採用試験の面接では、実習での体験を話す機会もあり、幸い、合格することができました。実習で感じた思いをこれからも忘れずに、教員として頑張っていきたいと思っています。



教育実習報告

生徒との関わりから
学んだこと

国文学科4年 佐藤美姫

教育実習は5月下旬から2週間、母校の高校でさせていただきました。私の母校は進学校ではなく、生徒たちに会うまでは「授業がまともに行えるのだろうか」という不安が大きかったです。

初日の朝のHRでは、担任の先生から紹介をしていただいたあと、さっそく出欠の確認と連絡事項の伝達を行いました。担当したのは1年生だったのですが、かなり元気が良いクラスで、私は緊張すると声が小さくなってしまうため、生徒を静かにさせることもなかなかできず、出欠を確認するのに時間がかかってしまいました。そこで担任の先生から「声だけはとにかく大きく!」とアドバイスされ、それだけは絶対に守ろうと2週間頑張りました。

1週目は体育祭があったた

め、ほとんど授業はありませんでした。朝早くから応援の練習をしたり、放課後残って準備をしている生徒たちの姿をたくさん見ることができて、ラッキーだったと思います。私は、授業のやり易さ・やりにくさは生徒との信頼関係がどれだけ出来上がっているかに大きく左右されと考えているからです。また、授業をする前に生徒の名前を覚えたり、それぞれの良いところ・悪いところを直接見られたことであらかじめ対策を立てることができたこともよかったです。

2週目には国語総合の授業を2クラスで行いました。教材が『星の王子さま』で苦手分野だったので非常に不安がありましたが、担当教員の先生に助けられ、どうにか毎時間を乗り越えることができました。生徒たちは相

変わらずうるさかったのですが、それでも授業を始めて10分経てば静かになるようになりましたし、授業中に疑問に思ったことや作品の解釈が納得いかない時に質問をするなど、少しずつ授業に興味を

示してくれているようで嬉しかったです。

また、私の母校は総合学科の高校なので「産業社会と人間」という授業で生徒たちに話をする場面もありました。なぜ大学に進学したのか、どうやって進学したのか、今後どう生きていきたいかなどを実習生2人で1年生8クラスにそれぞれ伝えました。「10年後の自分を考える」という授業の目標に対して、高校生の頃の自分が考えていたこと、それがどのように変わっていったかがあるのかということを生徒たちが目を輝かせて聞いてくれたのが印象的でした。

実習において1番嬉しかったのは、最終日の帰りのHRの後に、ある生徒が「先生みたいになりたいんですけど、まずは何をしたら良いのかな?」と具体的に自分の未来を考えるようになってくれたことです。放課後に毎日生徒とおしゃべりしたり、授業のない時間に保健室にたむろしている生徒と向き合うようにしていたので、それが生徒の心に響いたのではないかと思います。

実習は2週間という本当に短い期間でしたが、この経験を忘れることなく、生徒たちととことん向き合うという自分のやり方に自信を持てていきたいです。そして、これから出会うたくさんの生徒たちとも信頼関係を築いていけるよう、努力を続けていきたいです。



寄せ書き

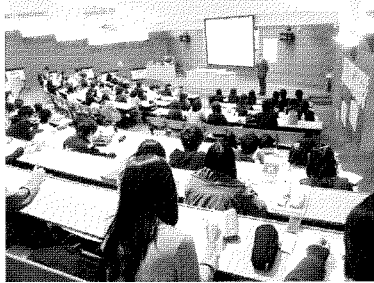
講演会だより

英文学科・英文学会共催秋季講演会

英文学科
講演会の報告英文学科 2 年
岩本愛美

11 月 5 日(金)に、本学 2 号館において、英文学科・英文学会共催による秋季講演会が開催されました。講師として、麗澤大学・外国語学部教授の望月正道先生をお呼びし、「英語語彙の効果的な指導法」という演題で講演していただきました。

望月先生は、東京外国語大学



を卒業、英国エセックス大学大学院で応用言語学修士課程を修了されました。大妻嵐山女子高等学校で英語教諭としての経験もあり、現在大学では、英語科教育法や教育実習関係科目を、大学院では、語彙論や英語教育学原論などを担当されています。主な著書として、『英語語彙指導マニュアル』(2003、大修館書店)、『英語語彙指導の実践アイデア集 活動例からテスト作成まで』(2010、大修館書店)や、高校英語検定教科書『World Trek I/II』(ピアソン桐原書店)などがあります。英語語彙サイズテストの開発も行い、日本の英語教育界を担っている望月先生の講演は、将来英語教諭を目指している多くの学

生にとって、多くの刺激があるものでした。

講演内容は、まず「語彙知識とは何か」を考え、次に、これまで語彙指導として行われてきた方法や活動を第二言語習得研究の立場から見直すというもので、効果的な語彙指導の方法を模索したり、テストを行って自分の語彙サイズを測ったりするという、聴衆にも参加してもらうワークショップ的な講演でした。

私たちが経験からいいと思っていた語彙の指導法が、第二言語習得研究の実証結果から見ると、実はあまり適しているとは言えなかったり、自分の語彙サイズがどれほどのものだったのかなど、いろいろと気づくことが多い講演でした。

講演の中で私が一番興味深かったのは、英語語彙の効果的な覚えさせ方でした。他言語を習得する際に効果的な方法として、英単語とそれに対応する母語のリストを渡し、定期的に確認を繰り返し行うことを提案されていました。

そのうえで、英語で導入(オーラル・イントロダクション)を行うことで、英単語の想起を導き、学習者の脳に記憶しやすくするというものでした。

もう一つ印象に残ったことは、単語の記憶に影響する要因



講師の望月正道先生

は、処理の深さと頻度であり、どれだけ多くの単語と深く関わり、どれだけ多くの単語と出会うかが、語彙力増加に影響してくるということでした。このことは指導者になった時に役立つだけでなく、今英語を学んでいる私たち学生にも、とても有益な情報でした。

質疑応答の際や講演後には多くの学生が望月先生に質問をし、どれほど熱心に講演を聴いていたかがよくわかりました。今回の望月先生の講演を聞いて、どのような指導法が学習者にとって適切な指導法なのか、将来英語教諭になった時に考えるヒントになりました。

このような貴重な機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

講師紹介

望月正道(もちづき・まさみち)

1959 年 3 月生まれ

東京外国語大学を 1982 年に卒業。

1991 年にエセックス大学大学院応用言語学修士課程修了。

大妻嵐山女子高等学校教諭を経験。

現在は麗澤大学外国語学部の教授を勤め、英語科教育法、教育実習、大学院で語彙論、英語教育学原論などを担当している。

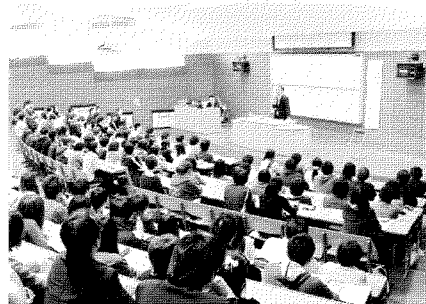
講演会だより

キャリアサポート講演会

「壁や障害やハードルがあることこそがチャンス」

上杉 隆先生

「運はよかったが、
自分で行動したのは運ではない」



去る平成22年10月22日、キャリアサポート講演会「壁や障害やハードルがあることこそがチャンス」と題して、本学英文学科卒業生、フリージャーナリストの上杉隆氏を2号館101教室に招き講演をいただいた。その概要をレポートする。



さて、上杉氏ははじめに大学時代の思い出から語り始めた。上杉氏の大学生活はとにかくアルバイトとゴルフであった。大学にゴルフ部がなく練習場も無かったため、大学入り口にある建設業「大建総業」にあるゴルフ練習場を借りて練習した。

就職活動は3年生の秋から。ジャーナリストになりたかったと思った最初の動機は、「世界中のさまざまなことを見て回りたいかった」であった。

NHKから内定をもらい働き始めた。学生時代からの上杉氏の姿勢は、情報や機会を待つのではなく、自分からいろいろ動き、情報や機会を得たことである。

NHKをやめた後、鳩山邦夫氏の秘書となった。その後、秘書をやめジャーナリズムの世界に戻ろうとしたが、日本のメディアでは、政治家秘書であった経歴が、政治家との癒着などを疑われ採用されなかった。そこで当時朝日新聞本社にあったNew York Times 東京支局に向かった。

New York Times では日本のメディアに否定された秘書としての経験が買われた。New York Times では、日本メディアを海外から客観的に見る事ができた。

日本のメディアは横並び意識が強く、記者クラブを通じて、公式発表を鵜呑みにした報道になりがちである。この報道姿勢が、年金問題や薬害肝炎問題などの発覚を遅らせ、被害の拡大と深刻化を招いたと厳しく指弾された。

上杉氏は、学生時代より行動にて社会に近づき、機会を手に入れると同時に、社会の課題をも発見した。この姿勢は今日の学生に多くの有益な示唆を与えていると感じた講演会であった。

(情報センター：日向良和)

講師紹介



上杉 隆(うえすぎ・たかし)

1968年(昭和43年)5月3日生まれ

本学英文学科卒業

フリージャーナリスト

大学在学中から富士屋ホテルで働き、卒業後NHK報道局勤務。

鳩山邦夫の公設第一秘書を5年間務める。

ニューヨーク・タイムズ東京支局取材記者を経て、フリージャーナリストとなる。

講演会だより

ジェンダー研究プログラム運営委員会主催 講演会

廣川明子先生 「企業における ワーク・ライフ・バランスの現状」



10月20日（水）、大和総研㈱経営コンサルティング部の廣川明子先生をお招きして表記の講演会を開催し、企業社会の実態やワーク・ライフ・バランスの達成に向けた課題についてお話を伺いました。質疑やその後の茶話会では、参加した学生たちからもたくさんの質問が出され、廣川先生よりご丁寧なご説明をいただきました。参加した3人の学生の感想をご紹介します。

（社会学科：村上研一）

KYさん：私は以前から、仕事と私生活とのバランスを自分自身で選択できるという、ワーク・ライフ・バランスについて、とても理想的な考え方だと感じていました。しかし、廣川先生の講演を聞き、個人だけでなく企業側にも「人材の確保」「効率的な業務運営」「ブランド価値の向上」といったメリットがあることを知りました。ワーク・ライフ・バランスが賞賛すべき価値観だと、企業の社会的責任だから

推進されているわけではないのだと思い、ますます魅力を感じました。しかし、ワーク・ライフ・バランスの導入に、多くの企業が消極的な現状が残念です。今後、ワーク・ライフ・バランスについて私たち一人ひとりが認識し、どのように取り組むべきかを考えることで、こういった状況を解決していく必要があると感じました。

KMさん：廣川明子先生の講演を聞いて、ワーク・ライフ・バランスの根本的なことから大和証券グループで取り入れられているワーク・ライフ・バランスの状況まで知ることができて、大変刺激を受けました。出産後、仕事を辞める人と出産後も仕事を続けた人との生涯での収入の差は2億円にも及ぶことを知り、働く女性として生きることにより一層魅力を感じ、私のキャリアウーマンになりたいという思いが強くなりました。日本はまだ

女性の社会的地位や雇用の面において、先進国の中でも遅れている方なので、仕事もプライベートも充実している女性がもっと増えて欲しいと思います。そのためには、ワーク・ライフ・バランスの考え方がもっと受け入れられやすい社会や風潮、環境づくりに国を挙げて積極的に取り組み、企業側からの理解を得られるようにしていく必要があると思いました。

MNさん：今回廣川先生の講演を聴いて、ワーク・ライフ・バランス（以下WLB）のあり方と現状について学ぶことができました。WLBとは、仕事と生活との調和であり、女性にとってはもちろんのこと、男性にとっても働く上で必要なものです。また、深刻な少子化や就職問題等の社会的問題の解決策でもあります。しかしWLBの導入に対し、多くの企業は消極的です。導入に積極的な企業でも、制度を利用しない社員の不公平感や、会社と社員とのギャップという壁に突き当たることも多々あるようです。大和証券がWLBを実行しているのは、企業と社員がWLBのメリットをしつかりと理解し、同じ目的を持って乗り越えてきたからであると感じます。今後、多くの企業がWLBの必要性を理解し、価値観の違いを乗り越えることが、企業や社員、社会にとって良い効果をもたらすのではないかと思います。

講師紹介



廣川明子（ひろかわ・あきこ）

経営コンサルタント（社会保険労務士）、
大和総研（株）企業経営コンサルティング
部所属

法政大学大学院経営学研究科人材組織マネジメントコース修了

主な寄稿に「管理職の労務法虎の巻」（『日経産業新聞』2010年4月7日）、「労務のいま A to Z」（『日経産業新聞』にて連載中）。

武居秀樹先生に送る言葉

志半ばにして、
その思いを共有しつつ

社会学科教授
横田 力

武居秀樹先生は1956年6月茨城県水戸市にお生まれになり、以降若き日の多感な時代を当地で過ごされた。中学・高校時代は勉学とスポーツの両道において人並みならぬ努力と成果をあげてこられた。特にスポーツにおいては一貫して水泳部に所属し、高校時代にはいましてインターハイに出場するまでの力量を示されていた。このことは、私と居酒屋で飲みながら彼もよく話すところで、余程の思い出があったものと思われる。その後大学では東経大の北田芳治ゼミに所属し経済学を専攻、この頃より経済学をはじめとするマルクス主義の社会科学理論に人生の、そしてより良い社会を創るという彼の使命を実現せんがための希望の光を見出していったものと思われる。

これもまた彼との居酒屋での楽しい会話として思い出すのであるが、年齢では彼より数年上の私は、当然のことながら60年代後半から70年代前半にかけての若者にとつての激動の時代を身をもって体験してきたわけであるが、その時の個々の事例を彼に話したときの体験の共有性に一度ならず

驚いたものである。

当時の年毎に急変する事象に対して、数年の学齢の差は当然のことながら本来共時的には事態を共有してはいないのである。しかし、そこでの会話が単に歴史事象としての理解を超えて、恰も臨場感ある体験談であるかのように彼との間で成り立つということは、彼がいかに社会に対して、そして正義に対して早熟で鋭敏であったかを如実に示しているといえよう。そのような訳で私は彼に対する信頼を一段と深めていったが、私が学外研究から戻り一年が経ち、2007年4月から学科主任となり、彼は組合書記長として、また法人化対策のWGの責任者として、共に暗雲たち込める現状にあって自由と自治に基づく大学を再度創っていこうとする矢先、丁度今から3年前のその年11月に、彼に不幸が襲ったのである。

その間にあつて、彼は履歴からしても本格的な研究の開始は遅かったものの、東京都政の研究を中心に都市自治体論、格差社会論、企業構造論と精力的に研究を進め、2001年から7年の間に延べ15本の論文を発表し、それらの殆どは紀要や学会誌のレヴェルに留まらず、『世界』（岩波書店）、『経済』（新日本出版社）、『住民と自治』（自治体研究社）といった広く市民及び勤労者大衆に支持された定評ある雑誌に掲載され、社会の革新と運功の糧となつていったのである。

そのような

中で彼の学問研究の方法的基礎を固めたのが『政経研究』70号に載った『日本における「自治体版福祉国家」の形成・成立・崩壊—美濃部東京都政の歴史的意義と限界』であり、そこには戦後現代史研究の方法的視座として有力な企業社会—開発主義国家論をベースに、「日本型福祉国家的合意」の成立と変容・崩壊の過程が、都政をめぐる諸勢力の対立と妥協そして都民に対する合意調達のメカニズムとの関係で見事に描写されている。そしてこのような視点は彼が主たる編著者となつて2007年に上梓された『石原都政の検証』（青木書店）へと引き継がれ、グローバリゼーションの中における体系的な都市自治論へと本来であるならば彫琢されていくはずであった。

「本来であれば」との言葉の含意はお分かりと思うが、人が研究者として生きた証しは、その人が思想をつくりそれが理論となつてリテラルに社会に示されたときはじめて証されるものとしたとき、彼の生きた軌跡は、それを証するには余りにも短かったと言わざるを得ないからである。

ただ言えることは、彼は間違いなく思想を生きてきた社会的使命の担い手だったということであり、それがあつたからこそ今日の状況の厳しさの中にあつても彼との対話が常に人間的にそして社会的に成り立ってきたと確信するのである。

「志（こころざし）半ば」強い矜持と使命を持った者ならこれ以上無念なことはなからう。

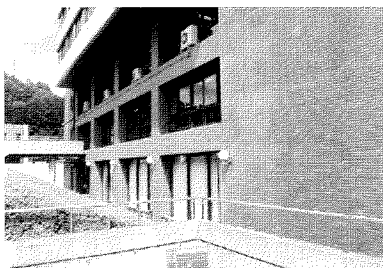
心より御冥福をお祈り申し上げる次第である。



在りし日の武居先生(学報対談にて)

特別企画

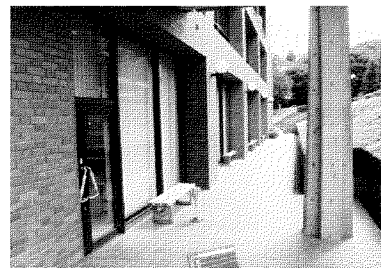
本部棟耐震工事



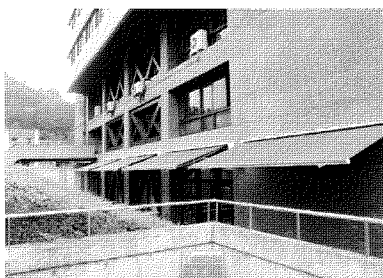
本部棟1号館側（着工前）



本部棟2階窓口（着工前）



1号館側テラス（着工前）



本部棟1号館側（完成後）



本部棟2階窓口（完成後）



1号館側テラス（完成後）

今年8月から本格的な耐震補強改修に着手した本部棟も、9月末には1階学食部分が完成し、残る2階以上のフロアーも11月末には完成する運びとなりました。

夏休み時期には、コンクリートを砕く騒音と粉塵により4・5階の使用できるはずの研究室も立ち入りたくない状況でしたが、最近になりようやく落ち着いてまいりました。

教職員をはじめ、学生や非常勤講師の方々にも大変ご迷惑をおかけしましたが、どんなところが変わったのかを写真によりお知らせすると共に、もうしばらくご協力をお願いいたします。



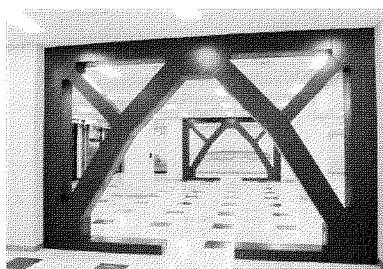
学食内配膳口（着工前）



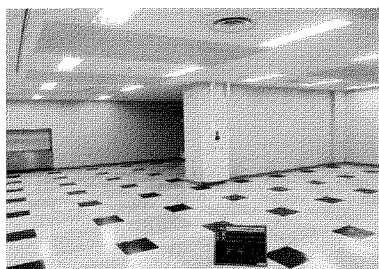
学食内売店スペース（着工前）



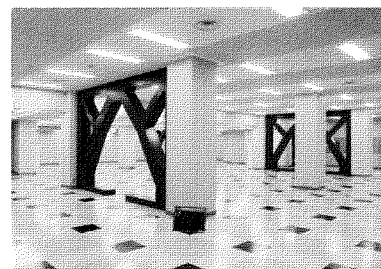
学食内出入口方面（着工前）



学食内配膳口（完成後）



学食内売店スペース（完成後）



学食内出入口方面（完成後）

文大だより

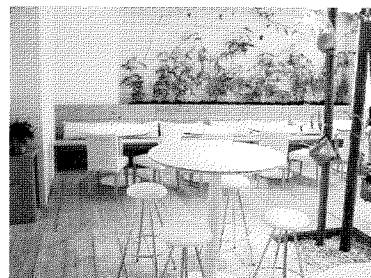
東京・大阪に就職活動の拠点誕生！

今年10月から東京・大阪に本学学生の就職活動拠点として、「PASONA 学職カフェ」が無料で利用できるようになりました。

本学では、パソナグループとの提携のもと、同カフェでの個別就活相談、同社主催の就活セミナー、企業検索等のパソコン

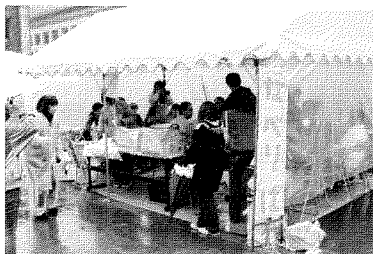
使用、休憩スペース使用などさまざまな就職支援サービスが受けられます。

東京駅前店は東京駅日本橋口から徒歩1分のパソナグループ本社1階に、梅田店は地下鉄梅田駅から徒歩1分の阪急ターミナルビル11階にありますので就職活動の際には有効に活用し



てください。また、他にも無料サービスがありますので、東京・大阪で就職活動をする本学学生は1度は立ち寄ってみてください。

第55回桂川祭



雨の中、テントの中での「なべりば」

10月28日（木）から30日（土）までの3日間にわたり第55回桂川祭が開催されました。

今年の桂川祭は、参加する全

ての人たちと絆を繋ぐという願いを込めて『LINK!』をテーマとして台風が接近する荒天の中、学内の各団体による模擬店や文化展、清水ミチコ氏のトークライブなどが行われました。

また、「学長と鍋ろう」では加藤祐三学長、高田理孝副学長が豪雨の中にも拘らず、テント内で1時間ほど学生たちと会話を楽しみました。

今回は2日目以外は雨天でし



雨のため室内でのステージ

たが、最終日の閉会式には雨も上がり、多くの来場者の見守る中でカウントダウン終了と共に1号館の上空に打ち上げ花火があがり華やかに夜空を照らし、3日間の幕を閉じました。

空手部 荻原選手堂々の4連覇

10月31日（日）に福岡県福岡市九電記念体育館で行われた「第32回全国国公立大学空手道選手権大会」において、本学空手部の初等教育学科4年荻原知佐さんが女子形の部で優勝しました。

このため、同大会では1年生の初出場から同種目は全て優勝となり、4年連続優勝という偉業を達成しました。

また、今回の同大会では男子

形の部でも比較文化学科2年福島良輔さんもベスト8という結果を収めるなど、本学空手部も各大会での活躍が期待されます。



第32回全国国公立大学空手道選手権大会
2010年10月31日（日）

女子形の部 優勝（4連覇）

初等教育学科4年 荻原知佐（おぎはら ちさ）

男子形の部 ベスト8

比較文化学科2年 福島良輔（ふくしま りょうすけ）

文大だより

平成 22 年度県民コミュニティーカレッジ講座開催

大学コンソーシアムやまなし主催、地域交流研究センター共催の、「県民コミュニティーカレッジ講座」の地域ベース講座は、比較文化学科が中心となり、10月1日(金)、8日(金)、15日(金)、26日(火)の4回にわたって附属図書館4階学習室で開催されました。

今回の総合テーマは「多元的社会のありかた」として、第1回目が重富恵子専任講師による「オーストラリアとボ

リビアの多文化状況と取り組み」、2回目が内山史子専任講師の「フィリピンの多文化状況と言語事情」、3回目が山本芳美准教授の「台湾の少数言語と少数民族文化を守る取り組み」、4回目が非常勤講師の家上幸子氏による「日本の外国ルーツの子供たちの取り組みと支援」について講演され、国際化が進行し多元的で複合的な社会情勢のな

かで、外国から来た人々とこれからどう付き合っていくのかを考えさせられる講座となりました。



第1回目重富恵子専任講師の講座

夏と秋に市民公開講座を開催

今年の地域交流研究センター主催の市民公開講座は、夏休み期間中の8月と晩秋の11月中の2回にそれぞれ企画を分けて開催しました。

夏休み期間中の講座は、8月5日(木)に昨年も初等教育学科理科教室が行い好評であった、小学生とその親を対象とした「親子で楽しむ夏休み自然・科学教室」を開催し、当日の午前中は初等教育学科の

吉住典子准教授が「葉脈のしおりを作ろう」、午後は同学科山森美穂准教授が「目指せ！親子でスライムマスター！」の2講座を開催しました。

開催当日は近隣の小学生たちが夏休みの自由研究に活用しようと参加しており、また実験の指導役の同ゼミ学生たちにとっても、小学校での実験授業の実習になると、双方に喜ばれるものとなりました。

秋の講座は、一般向け講座として「政権交代1年を迎えた民主党政権と今後の日本」について、社会学科現代社会専攻の教員が講師となり、11月1日から毎週月曜日に政治、経済、歴史の各観点から考察し、4回シリーズの最後には



「目指せ！親子でスライムマスター！」

各講師陣が鼎談を行うという企画で開催されました。

初回は、社会学科進藤兵教授が政治学の観点から分析し、その後に経済学の観点からは村上研一専任講師、歴史学の観点からは菊池信輝准教授が講義し、最終回ではこの三教員がそれぞれの専門分野を超えて日本社会はどこへ向かうのかを討議し、また、その中に参加者の意見も取り入れながら、更に参加者の方々も共に考えるという貴重な講座となりました。



秋の講座

文大だより

平成 22 年度都留文科大学現職教員教育講座

本学独自の「夏季集中講座」現職教員教育講座が、山梨県教育センターの教職 10 年研修事業との併設講座として、今年は 7 月 28 日(水)、29 日(木) 2 日間の日程で開催されました。今年は教員免許状更新講習の日程が翌 30 日(金)から始まることもあり、例年 3 日間行う講座を 2 日間に短縮して実施しました。

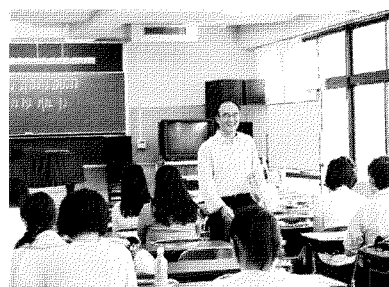
全体的な講座テーマは例年通り『教師の子ども理解と学習指導』についてでしたが、

今年は学力をめぐる問題に焦点を当てた講座が中心となりました。

7 月 28 日(水)午前は「学力とは何か」を初等教育学科田中昌弥教授、同日午後の「子ども理解と学習指導」については元小学校教諭で本学非常勤講師の山崎隆夫氏が講義しました。29 日(木)の 2 日目は「教科に関する研究講座」として午前を初等教育学科の音楽教室清水雅彦教授が音楽の授業について、午後は本学卒業生で

国学院大学教授でもある滝井章氏に、算数のわかりやすい授業の組み立て方などの講義をしていただきました。

例年この時期に実施している同講座については、県内はもとより近隣都県からも多くの参加があり、毎年教育を考える場として期待する声も多く寄せられています。



清水雅彦教授の授業

文大名画座 ～名画の上映とトーク第 8 弾～

今回で 8 シリーズ目となる文大名画座は、試行的に例年の週 1 回開催から週 2 回開催を取り入れ、10 月と 11 月の 2 ヶ月 7 日間に渡り実施しました。

今回は法人化後に取り入れられた特任教員などの新任教員の方々を中心として、作品は SF、ミュージカル、長編など多彩な 6 作品を解説し上映しました。

開催内容は次のとおりで、

10 月 7 日(木)の上映作品は「アイアンマン」、解説者は情報センター日向良和専任講師、10 月 12 日(火)と 10 月 14 日(木)は「アラビアのロレンス」の前編と後編に分け国文学科新保祐司教授が解説しました。

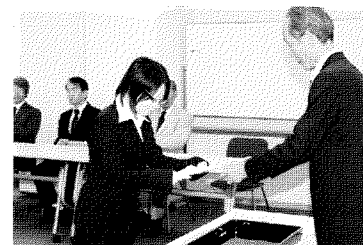
10 月 19 日(火)の上映作品は「こねこ」、解説者は英文学科三浦幸子准教授、10 月 21 日(木)の上映作品は「天使にラブソングを」、

解説者は地域交流研究センター品田笑子特任教授、11 月に入り 11 月 11 日(木)の上映作品は「ディア・ドクター」、解説者は地域交流研究センター北垣憲仁特任准教授、最終回の 11 月 16 日(火)の上映作品は「星の王子さま」、解説者は国文学科新見公康特任教授が行い、全 6 作品 7 日間の日程を終了しました。参加者は作品により増減しますが学生や市民の中には根強いファンもあり、次年度開催を期待しているとのことでした。

前期終了者卒業式

9 月 29 日(水)本学附属図書館 4 階学習室において、

平成 22 年度前期終了卒業証書の授与式が行われました。当日は学部卒業生 12 名中 6 名が出席し、担当教官が見守るなか加藤祐三学長から卒業証書が授与されました。



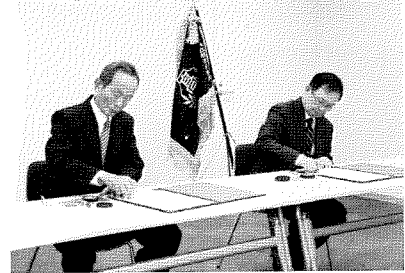
文大だより

大学と桂高校が高大学連携事業協定に調印

10月25日(月) 本学附属図書館4階学習室において、本学と県立桂高等学校との間で、両者の教育内容の充実、学生及び生徒の資質向上などを目的とした「高大連携事業に関する協定書」の調印式が行われ、本学から加藤祐三学長、桂高

等学校からは深沢信吾校長が同協定書にサインするとともに握手を交わしました。

この協定により、本学がこれまで実施してきた当高校での公開講座や模擬授業、本学教室を使用した夏期講習などをより一層充実させ、本学で

事業協定書調印式
2021年10月25日

サインする加藤祐三学長と深沢信吾校長

の地域貢献活動の一翼を担う事業として地元からも注目を集めました。

リジャйна大学表敬訪問

9月13日(月)に本学の語学研修プログラムの実施先のひとつであるカナダ・リジャйна大学から同大学生涯学習センター所長ハーヴィー・キング氏と現地日本人カウ

ンセラー永井栄子氏が本学を表敬訪問に訪れました。

本学からは加藤祐三学長と国際交流室滝口峰子専門員が出迎え、両大学の交流について今後も良好で発展的な関係



リジャйна大学来校

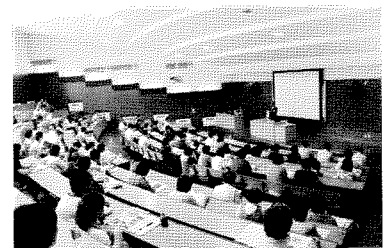
を継続することが双方で確認されました。

秋季オープンキャンパス開催される

10月14日(木)から26日(火)までの水曜日、土曜日、日曜日を除く8日間にわたり、秋季オープンキャンパスが開催され、例年どおり公開授業、進学相談、キャンパスツアー、学食体験などを実施しました。今年は保護者を含めると昨年を大きく上回る

259名の参加がありましたが、ほとんどが桂高校からの体験学習での参加者で、実質的には保護者と1、2年生が増加傾向となりました。

また、今回のオープンキャンパス開催時期が、本部棟耐震工事と重なり、相談スペースや参加者待合場所などが取



夏季オープンキャンパス

れず不便を強いることが多々ありましたが、本学受験希望者からは、公開授業などを通じ大学の雰囲気が感じとれ大変良かったなどの感想が寄せられました。

昇任及び採用人事

平成22年10月1日付けで社会学科講師泉桂子氏が准教授に昇任され、11月1日付けで事務職員に井上邦男氏、図書館司書職員に松尾陽子氏の2名が新規に採用となりました。この事務系職員2名は初めての法人採用の職員となり、今後の活躍が期待されます。

編集後記

IT 教育

日向良和

教員になり広報委員をつとめるようになって半年がたった。この半年は試行錯誤で無我夢中だったような気がする。

前期で印象に残ったのはやはりオープンキャンパスであろう。たくさんの方の高校生やその父母の方々に図書館 iPad の体験をしていただいた。父母の方々は体験に戸惑うかとも思われたが、特に問題もなく操作していたのが印象に残った。パソコンやインターネットが各家庭に普及し、携帯電話を使いこなすことが普通になってきた証かもしれない。学生も講義でパソコンの使い方がわからない学生はほとんどいない。アパートにパソコンがある学生も多数になってきている。

パソコンの「使い方」は以前からいろいろな問題があったが、以前は使用者が限られたため目立つことはなかった。しかし現在多数の人がコンピュータを使うようになりその問題が顕在化している。学生に情報リテラシーを伝えながら、「大学に進学しなかった人たち」や「既に大学を卒業した人たち」の情報リテラシー向上はどうすればいいのかと考えるようになっていく。

社会ではインターネットなど情報収集ツールが高度に発達・普及し、一人が得ることができる情報はこの 10 年で増大している。就活などで見られるように、コンピュータを使って情報収集をしていることが大前提として、さまざまな社会活動がおこなわれているように見える。一方で、これまで窓口やカウンターで対応してきた人が削減され、コンピュータを強制的に使用させるような社会になってきている。

そのような社会では、情報リテラシーのレベルの高低が社会生活のレベルに直接影響するようになっていく。これまでは義務教育で生活の最低限の能力（読み、書き、計算）を身につけさせていたが、今後はこれに情報リテラシーが入ってくると考える。そこで、既に義務教育が終わり、情報リテラシーを身につける機会の無かった人々への支援が今後社会教育施設で重要になってくるのではないかと考えている。

本
ぶんだい堂

高度成長の時代
復興と離陸

進藤 兵 他／編
2010 年 10 月
大月書店 3,800 円 + 税

◇しんどうひょう 社会学科教授



英国発
「新しい公共」を実現するために
グラウンドワーク

渡辺豊博・松下重雄／著
2010 年 8 月
春風社 1,500 円 + 税

◇わたなべとよひろ 社会学科教授



三島のジャンボさん
ミスター・グラウンドワーク

渡辺豊博／著
2010 年 8 月
春風社 1,429 円 + 税

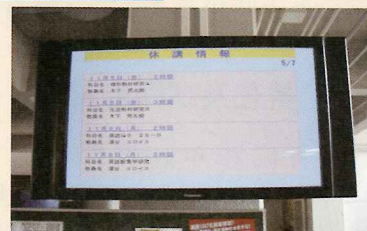
◇わたなべとよひろ 社会学科教授

インフォメーション ～情報センターからのお知らせ

電子掲示板の設置

1 号館 1 階ホールの入口付近、本部棟 1 階の入口付近に 50 インチの電子掲示板を設置し、平成 22 年 10 月 1 日より運用を開始いたしました。電子掲示板には学生向けに「お知らせ」、「休講情報」、「呼び出し」、「補習情報」、「教室変更」、「ガイダンス」などの情報を案内しています。又、これらの情報は携帯電話でも閲覧することができます。携帯電話用アドレス（URL）は下記のとおりです。

携帯電話用アドレス：URL <https://ptweb.tsuru.ac.jp/step/mb/>



1 号館 1 階ホール